

大日本帝国陸軍 歩兵第 10 連隊（岡山・鉄 5448 部隊）

戦史調査資料

著者： 岩崎純一（大日本帝国陸軍岡山歩兵第 10 連隊・岡山近衛兵将校子孫会）

編： 吉川りせ、道満幸江（大日本帝国陸軍岡山歩兵第 10 連隊・岡山近衛兵将校子孫会）

発行： 大日本帝国陸軍岡山歩兵第 10 連隊・岡山近衛兵将校子孫会

資料収集・調査開始： 2012 年

作成開始年月日： 2016 年（平成 28 年）5 月 22 日

公開年月日： 2016 年（平成 28 年）7 月 7 日

追記年月日： 2016 年（平成 28 年）11 月 8 日

更新年月日： 2019 年（平成 31 年）4 月 1 日

最終更新年月日： 2019 年（令和元年）10 月 8 日

掲載サイト： <http://iwasakijunichi.net/>

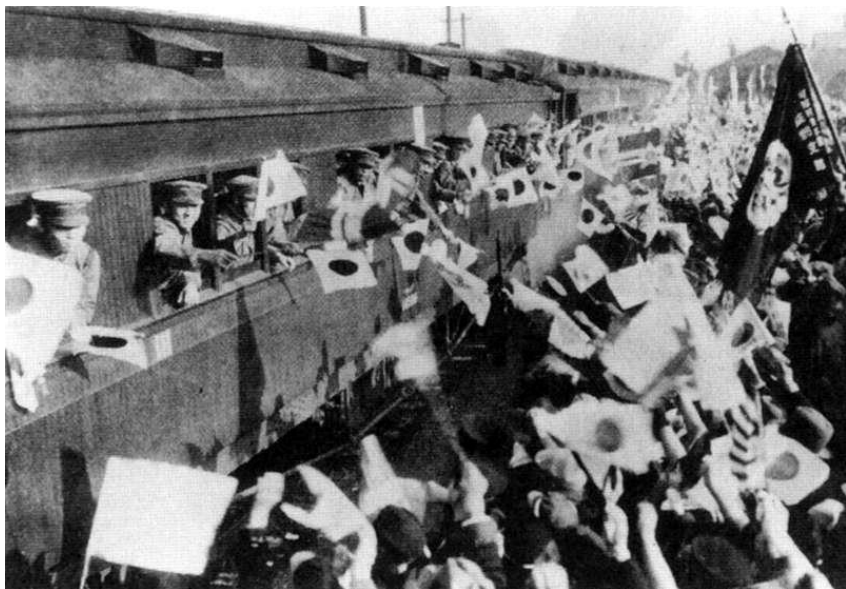
新たな情報・証言の確証が取れるたびに更新しています。

目次

1. 歩兵第 10 連隊概要
2. 用語説明
3. ルソン島南北地域の戦況の比較
4. 歩兵第 10 連隊戦史年表
5. 歩兵第 10 連隊将校名簿
6. 歩兵第 10 連隊戦友会一覧

参考文献

1. 歩兵第 10 連隊概要



(左：1931 年満州事変動員のため岡山駅にて 右：復元された軍旗が展示されている岡山県護国神社)

岡山歩兵第 10 連隊は、フィリピン戦線に投入された第 14 方面軍の全ての師団・連隊・部隊のうち、確認できる限り、最後に投入され、最後まで抗戦し（1946 年 3 月）、最後に帰還し（小野田寛郎少尉などのルバング島残留兵を除く）、かつ生存者が最少の部隊であった。連隊の創設はこの中で最も早く、初陣は西南の役であり、父子二代での同連隊経験者も多かった。岡山県出身の宇垣一成のいわゆる「宇垣軍縮」により、正式に姫路から岡山へ転営した。

フィリピン戦線では、第 8 師団、第 19 師団、第 23 師団、第 103 師団、第 105 師団、その他の集成・混成部隊がサイパン、マリアナ沖、台

湾沖、レイテ島、レイテ沖、プンカン、マニラ、ミンドロ、バギオなどで壊滅し、戦艦武蔵も海の底に沈んで過去のものとなっていた。その後、岡山歩兵第 10 連隊はバレー峠で激闘を展開するも壊滅、1945 年 6 月 23 日の第 103 師団壊滅をもって全フィリピン戦線が崩壊した。

残留部隊の中で、ルソン島最北部の第 10 師団配下部隊が最も遅く敗戦の情報・ビラを受容した。姫路歩兵第 39 連隊と松江歩兵第 63 連隊は、やや早く捕虜収容所に収容され、内地（日本本土）に引き揚げており、最後の最後は、岡山の残留兵が抗日ゲリラやフクバラハップ、米軍の残留兵と戦うこととなった。しかし、情報受容後も、一部の歩兵は終戦を信じる気力が湧かず、無視し、ビラで草を巻き、葉巻にして吸っては捨て、半年間抗戦した。

歩兵第 10 連隊（通称号：鉄 5448 部隊）	
編成地：岡山（現岡山大学、岡山県総合グラウンド） 編成時期：明治 7 年 隊長級歩兵の岡山出身者の割合：85% 全歩兵の岡山県出身者の割合：95%	
上級組織：大日本帝国陸軍 南方軍（威・NA） 第 14 方面軍 尚武集団 第 10 師団（鉄兵団）	
盧溝橋事件直後の召集・動員数：約 5000 名 上記の岡山駅出発時総員：3747 名 フィリピン行き満州出発時総員：2500 名 フィリピン行き人員増強による最大時の総員：3162 名～3248 名のいずれか (第 10 師団の兵士総数：	中国戦線での戦死兵数（被弾死、爆死、自決、餓死、戦病死、刑死）：1126 名 最終戦地：フィリピン・ルソン島北部 フィリピン戦線での戦死兵数（被弾死、爆死、自決、餓死、戦病死、刑死）：2942 名（戦死率：92%、歩兵第 10 連隊比島戦没者追悼之碑、岡山バレー会有志建立） 2939 名・生死不明 3 名（日本軍発表） 最終生存者：150 名～272 名のいずれか (第 10 師団の生存兵数：約 3000 名) (バレー峠での日本兵戦死者：7403 名、米軍発表) (ルソン全土の日本兵戦死者：21 万～32 万名) (フィリピン全土の日本兵戦死者：30 万～53 万名) (ルソン全土の米兵、ユサツフェ・ゲリラ、フィリピン兵、メキシコ兵戦死者：15 万～18 万名)

22000 名)	(フィリピン全土の米兵、ユサッフェ・ゲリラ、フィリピン兵、メキシコ兵戦死者：18 万～22 万名) (米軍配属フィリピン人抗日ゲリラ、単独フィリピン人抗日ゲリラ、フクバラハップなどを含む全フィリピン民間人死者：100 万～150 万名)
----------	--

2. 用語説明

斬込（きりこみ）、兎狩り（うさぎがり）

手榴弾や爆薬を入れた背囊（はいのう）を抱え（背負い）、敵の陣地や戦車などに匍匐（ほふく）前進で進み、突進・爆死する肉弾攻撃。最高の美德とされ、称賛された。「兎狩り」は、斬込の恐怖心を覆い隠すために連隊や斬込兵自身が用いた俗称。一隊が 5・6 人の斬込挺身隊が数百組織された。斬込兵は、遺書を書き遺し、大隊長や中隊長から水杯や恩賜のタバコが与えられ、何日もかけて米軍部隊や抗日ゲリラ部隊の後ろに回った。方面軍・師団・連隊長レベルで斬込命令が発せられたが、自ら希望する者が最も多かった。戦況悪化に伴い強制徴集となり、斬込命令を拒否すると、大隊長や中隊長によって射殺処分された。日中に行う場合、主に戦車の下に潜り込み爆破した。また、食事中を狙った。戦車への斬込を恐れた米軍は、空からガソリンの入ったドラム缶を落とし、これを機関銃で撃って火を付け、斬込兵を撃退・焼殺してから戦車を進攻させたが、斬込兵への対応は容易であった。斬込を夜襲として行う場合、米兵の張った天幕の中に侵入し、寝込みを襲い、手榴弾を投げたり銃剣で刺殺したりした。敵軍は電流を流した鉄条網を張って対抗したが、斬込兵も穴を掘って進攻した。自暴自棄になり、妄想や幻覚にとらわれ、軍刀のみを振りかざして戦車に突進し、撃たれる歩兵も現れた。

自活自戦・永久抗戦

南方軍第 14 方面軍司令官・山下奉文大将がフィリピン参戦中の配下師団・連隊に命じた。糧秣・物資の現地調達と降伏の禁止・終戦の拒否（永久戦争）を柱とする。これにより、日本兵はフィリピン人民家からの略奪を開始するが、餓死・戦病死が急増。岡山歩兵第 10 連隊は、ルソン島上陸時点で糧秣・物資を半数しか揚陸できておらず、最も早く自活自戦を開始することとなった。

抗日ゲリラ

日本軍による食糧買占め・略奪・虐殺・強姦などに対し、日本軍のマニラ占領直後から、主に現地のフィリピン民間人によりいくつも結成された。次第に親日フィリピン人も抗日ゲリラに転じ、米軍が武器・弾薬を与えて組織・訓練するようになり、現地の地理に疎い米軍歩兵を先導するに至った。まずマニラで抗日参戦したが、マニラでのゲリラ戦は終戦まで続いた。のちマニラを出てルソンの農村に進出したほか、米軍が

現地農民を新たにゲリラに組織して戦闘を展開した。日本軍はまずマニラおよびルソン南部でゲリラと全面決戦したため、当初ゲリラ北上は阻止され、北部の第 10 師団・歩兵第 10 連隊等はゲリラ決戦をほぼ免れた。しかし、終戦直前および終戦後に、歩兵第 10 連隊が散開するルソン北部に抗日ゲリラが進出、残留兵と激闘を展開した。

フクバラハップ (Hukbong Bayan Laban sa mga Hapon)

抗日ゲリラの一つ。1942 年 2 月 6 日にフィリピン共産党 (PKP) のルイス・タルクが結成。共産主義的性格のため、次第に米軍やユサップエ・ゲリラ、他の抗日ゲリラと敵対し孤立、フィリピン人民解放軍と名を変えるも、最終的に米軍やフィリピン共和国政府が弾圧して崩壊した。

ユサップエ・ゲリラ

日本軍によるマニラ占領およびフィリピン全土占領 (1941～42 年) ののちも現地に残存し抗戦した米兵ゲリラを指す。「ユサップエ」は、アメリカ極東陸軍 (U.S. Army Forces Far East, USAFFE) を意味する。1943 年の一年間でフィリピン人抗日ゲリラやフクバラハップと結びついて共闘、米軍を有利に導き、その後の米軍のサイパン、マリアナ沖、レイテ島、レイテ沖等での勝利に貢献した。一部のユサップエ・ゲリラは、そのまま米正規軍に再合流した。

マニラ大虐殺

マニラの抗日ゲリラや一般のマニラ市民に対して日本軍が組織的に行ったとされている大虐殺。米軍および一部のマニラ市民遺族は、日本軍によるものを「マニラ大虐殺」としている。一方、日本および一部のマニラ市民遺族は、日米両軍によるものとしたり、大虐殺の存在を否定している。実際は、日米両軍が組織的かつ単発的に虐殺を行っているが、日本軍による最初の組織的虐殺は、マニラではなく、マニラ市街戦終了後のマニラ以外におけるものである。日本軍における虐殺命令は、連隊・大隊・中隊長レベルの命令であり、連隊レベルで連行部隊と虐殺部隊を組織して虐殺を行った。南方軍と第 14 方面軍は、命令していないが許可・黙認した。マニラでの虐殺は、下記のフィリピン人粛清の一部であると見るべきである。

フィリピン人粛清

特にルソン島における日本兵によるフィリピン人殺害を指す。組織的粛清としては、フィリピン現地の連隊中、藤兵団長兼歩兵第 17 連隊長の藤重正従大佐が最初に命令。連隊の中隊長以上に集合を発令し、粛清を指示した。抗日ゲリラ部隊は、農民の服装をし、反対側が銃剣になっている鋤などの農具を用い、畑を耕しながら日本兵を待ち伏せしており、一般農民と区別がつかないためであった。また、ゲリラに食糧・物資を支援している協力住民も区別がつかないためであった。粛清命令には、殺害対象として「女や子供さえ含めて」「日本軍に反抗する全ての者」の文言が入っており、次第に、フィリピン人を見つけ次第、抗日ゲリラや協力住民か否かの確認をとらず、また女性や子供にかかわらず、先攻して殺害することを容認、最終的には、歩兵一人当たり千人のフィリピン人を殺害するよう不可能なことを命じた。これにより、事実上の無差別虐殺となった。こうして、まず歩兵第 17 連隊が連行部隊と虐殺部隊を整備し、粛清を開始した。各連隊にて、強姦も起きれば、連隊長に反抗し虐殺を拒否した歩兵は、自決したり上官が銃殺・刺殺するなどした。粛清に成功した部隊では、民家・農家・倉庫の乗っ取りと食糧略奪が容易になり、餓死・病死は激減した。殺害方法は、ゲリラ兵士をヤシやバナナの気につないで銃剣で刺殺、または銃撃、またはロープを首に巻いて両側を引くなどの方法がとられた。最終的に、第 14 方面軍司令部や師団もこれを黙認した。虐殺・強姦を実行した一部の歩兵は、戦中のみならず、終戦・内地帰還後も、良心の呵責によって自決した。

転進

戦闘地域の移動・転向を指すが、終戦期に用いられた場合、事実上の後退・敗走のこと。フィリピン人民家の食糧を盗んだり、先に転進しながら餓死した戦友の屍の足の軍靴を脱がせて借りつつ、移動した。各兵士は、戦友の屍の手の小指を切っては、遺族へ渡すため持ち帰った。一方で、極度の飢餓・栄養失調のため邪念が生じて戦友の肉を食した日本兵を、これに抵抗する日本兵が殺害したこともあった。

首狩り（首実検）

連合軍・米軍・フィリピン軍・抗日ゲリラ部隊は、軍事法廷において、親族・近隣住民・知人友人・同僚などを虐殺・略取・強姦されたフィリピン人を呼び寄せ、これらを実行した日本兵を指名させてから連行・処刑した。米軍による絞首刑のほか、フィリピン人遺族に刺殺・銃撃させる手法もとられた。人違い・冤罪による首狩りも多発した。首実検の待機中、歩兵らは自身への指名の可能性に備え、直前に処刑された歩兵

の遺書を預かりつつ自身の遺書を書き、順次後ろの歩兵に渡していった。当初は一日に3～5回、次第に減少し、ひらかれなくなった。

3. ルソン島南北地域の戦況の比較

連隊規模の近い連隊二隊を比較する。

歩兵連隊	歩兵第 10 連隊	歩兵第 17 連隊	解説
通称号	鉄 5448 部隊	杉 4717 部隊	
編成時期	1874（明治 7）年	1885（明治 18）年	
編成地域	岡山（西南戦争初陣。軍旗を掲げてフィリピン戦線に突入した唯一の連隊。）	秋田（十年遅れて急遽招集・編成された郷土部隊。）	陸軍の各歩兵連隊は、同一地域にて招集・編成された郷土部隊であった。
中軸年齢	17～29 歳	18～36 歳	
上級組織	大日本帝国陸軍 南方軍 第 14 方面軍（威・NA）（司令官：山下奉文大将）		
	直轄（尚武集団）第 10 師団 （司令官：山下奉文大将の直属）	第 41 軍（振武集団）第 8 師団 （司令官：横山静雄中将）	
		藤兵団 （兵団長：藤重正従大佐→少将）	
第 14 方面軍司令部からの距離	近（直属。直接の指令可。）	遠	
連隊長	田島正男大佐→岡山誠夫大佐	藤重正従大佐→少将	
戦闘地域	フィリピン・ルソン島北部 （農村部・山岳部およびルソン島北端に	フィリピン・ルソン島南部 （マニラ市街地・都市部）	

	抜ける幹線道路・街道)		
フィリピン戦線で要求された主な任務。	バレテ峠の幹線道路の制圧、第 14 方面軍司令部の護衛。 米軍を弱体化させ日本本土への進攻を遅らせるための斬込（肉弾攻撃）。	日本海軍との共闘によるマニラ市街戦での勝利。 抗日ゲリラの殲滅、フィリピン民間人の殺害。	
抗日ゲリラ・フィリピン人虐殺専門部隊	設置せず	歩兵第 17 連隊第 2 大隊配下 （大隊長：市村勲少佐） 連行部隊（連隊内だけの呼称） 虐殺部隊（連隊内だけの呼称） 虐殺地域：バタンガス、バウアン、タール、リパ、マニラ	
連隊長の思想・方針	連隊長・岡山誠夫大佐は、大隊長・中隊長・小隊長に対し、なるべく部隊の壊滅的犠牲を避けて勝利することを奨励し、転進の際に自決を申し出た歩兵に対し、「死ぬな」と諭した。フィリピン民間人に対する虐殺を命じた形跡はないが、虐殺を命じるほど、戦中はフィリピン人抗日ゲリラに遭遇してもいない。ただし、連隊の壊滅状態で終戦後に抗日ゲリラと激闘。戦略を立てる余裕はなかった。	連隊長・藤重正徳大佐は、抗日ゲリラ・抗日フィリピン人との戦闘に苦戦した結果、斬込を奨励し、フィリピン民間人の虐殺を命じるに至った。司令官の横山静雄中将の「玉砕は一切まかりならぬ。必ず迎えに行く。」との方針に楯突き、独自の行動をとった。肅清命令には、殺害対象として「女や子供さえ含めて」「日本軍に反抗する全ての者」の文言が入っており、最終的には、フィリピン人を見かけ	岡山大佐の方針は結果的に、食糧・物資の総量に対する連隊歩兵数の増加を招き、フィリピン人民家・農村での略奪の増加、極度の栄養失調、餓死・病死・自決の多発を連隊にもたらした。藤重大佐の方針は結果的に、歩兵への食糧・物資の調達効率化を招いたが、強姦の多発など連隊の行動の不統一をもたらした。

		たならば歩兵一人当たり千人でも殺害すべき旨を通達し、事実上の無差別虐殺を命じた。	
満州出発時の総数	2500 名	2500 名	
上記以降最多時の総数	3200 名	3000 名	
戦死者数	2942 名	2300 名	
被弾・爆死（斬込等の肉弾攻撃）者数	1300 名	1500 名	
餓死・病死（マラリア、アメーバ赤痢、デング熱等）者数	1500 名	600 名	元よりルソン島サン・フェルナンドへの上陸の際、米軍の攻撃のため、糧秣・物資・弾薬を半分～3分の2しか揚陸できなかったことも影響している。
自決者数	150 名	50 名	

米軍・フィリピン人による首狩り（首実検）処刑者数	30 名	150 名 （うち米軍裁判で 5 名、フィリピン裁判で 16 名、その他の報復で 100 名超。人違い・冤罪も多発した。） 藤兵団長・連隊長：藤重正従少将：死刑 第 2 大隊長・市村勲少佐：死刑→終身刑→特赦で釈放（同時に釈放された者多し。） 萩野舜平少尉（奈良出身）：死刑	歩兵第 17 連隊に対する首狩りは、虐殺・強姦されたフィリピン人の遺族が参加した極めて報復的なものであり、藤重大佐を含む幹部将校が多数処刑された。歩兵第 10 連隊に対しては、ルソン戦線に投入された歩兵の中でも比較的軽い首狩りのみが行われた。フィリピン人遺族による虐殺実行兵の相貌の記憶力とその復讐心はすさまじく、捕虜収容所で米軍に呼ばれ首狩りに参加したフィリピン人遺族のほとんどは、秋田の歩兵たちを指差した。岡山の歩兵たちは、内地では「ズーズー弁」を話す遠き秋田の歩兵たちが今は目の前で処刑される光景を、戦友として眺めるほかなかった。だが、稀に人違いも起き、岡山の歩兵も処刑された。
帰還兵総数	150 名～272 名のいずれか	700 名	

抗日ゲリラ部隊 (フィリピン民間人、フクバラハップ、ユサップ・ゲリラ) への対応	戦時中はゲリラにほとんど遭遇せず。 (歩兵第 17 連隊等がマニラ市街戦を展開し、ゲリラを食い止めたため。) 終戦後にゲリラとの戦闘を開始。	藤重正従大佐が無差別の虐殺を命令・主導し、拒否した歩兵を銃殺・刺殺。	もっぱら抗日ゲリラとの戦闘にどの時期に苦しめられたか否かによる。 岡山歩兵第 10 連隊にとって、抗日ゲリラ・フィリピン人虐殺部隊を有しルソン南部・マニラで激闘した秋田歩兵第 17 連隊が、自分たちよりも先に終戦を知り、米軍により武装解除され、帰還を開始したことは、致命的であった。最後の最後で、フィリピン人の報復を全面に受けることとなった。しかし、多くの歩兵は、報復を受ける前に餓死・戦病死することとなった。
フィリピン民間人に対する対応	岡山誠夫大佐は躊躇しており、虐殺命令が確認できない。元より終戦後までは抗日ゲリラ戦にあまり巻き込まれず、フィリピン民間人への無差別殺戮の必要性が生じなかった。	藤重正従大佐が無差別の虐殺を命令・主導し、拒否した歩兵を銃殺・刺殺。	もっぱら抗日ゲリラとの戦闘にどの時期に苦しめられたか否かによる。
フィリピン人民家・農家からの食糧略奪	多	少	歩兵第 10 連隊は、連隊長がフィリピン人粛清を命令しなかったため、フィリピン人に対する日本兵の数が多くなり、結果的に略奪も餓死も増えた。

フィリピン人女性に対する強姦	少	多	歩兵第 17 連隊は、マニラ大学・ロスバニョス農科大学などの女子学生やマニラの一般家庭の女性、抗日ゲリラの妻など、歩兵第 10 連隊よりも圧倒的に女性を目撃・襲撃する機会が多かったため。
----------------	---	---	---

4. 歩兵第 10 連隊戦史年表

年月日	大日本帝国陸軍 歩兵第 10 連隊 (岡山・鉄 5448 部隊) 上級組織：大日本帝国陸軍 南方軍(威・NA) 第 14 方面軍 尚武集団 第 10 師団	他の日本軍の戦闘状況 (主にフィリピンの戦闘状況)	米軍、フィリピン軍、抗日ゲリラ部隊 (フィリピン民間人、フクバラハップ、ユサップエ・ゲリラ)
1874 (明治 7) 年	姫路にて創設 (大阪鎮台姫路兵営)		
12 月 18 日	軍旗拝受。		
1877 (明治 10) 年	西南戦争に参戦。	西南戦争	
1888 (明治 21) 年	姫路にて再編 (大阪第 4 師団へ編入)		
1894 (明治 27) 年	日清戦争に参戦。	日清戦争	
1898 (明治 31) 年 10 月 1 日	姫路にて再編 (大阪第 4 師団から姫路・第 10 師団へ編入)	第 10 師団発足。岡山歩兵第 10 連隊、姫路歩兵第 39 連隊、松江歩兵第 63 連隊、鳥取歩兵第 40 連隊などで編成。	
1904 (明治 37) 年	日露戦争に参戦。 析木城、遼陽、沙河、奉天などで戦闘。	日露戦争 日本、この頃からルソン島バギオを中心にフィリピン開発。	米比両政府、この頃からフィリピン開発を日本に託す。以後、マニラ占領による抗日ゲリラ結成直前までは、親日フィリピン人多く、バギオ・マニラを中心にフィリピン繁栄。日本人・日系人・フィリピン人の中での結婚多。
1925 (大正 14) 年 5 月	宇垣軍縮により岡山へ転営。岡山県出身歩兵を投入して再編。(姫路・第 10 師団	宇垣軍縮	

	下)		
1931（昭和 6）年	東武満州の松花江付近へ移動・駐留。	満州事変 満蒙開拓団送出開始。	
1933（昭和 8）年	満州事変・熱河作戦に参戦。	熱河作戦	
1934（昭和 9）年	岡山県満蒙開拓団を満州・中ソ国境地域に送出開始。		
1937（昭和 12）年 7 月 7 日		盧溝橋事件勃発、北支事変・日中戦争始まる。	
7 月 27 日	日中戦争勃発により、歩兵第 10 連隊に動員令下る。		
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 5000、馬匹 40 中国出兵数 3747 連隊長：赤柴八重蔵大佐（1937 年 8 月 2 日～）		
8 月	岡山駅から歩兵第 10 連隊の第一陣 3747 人が中国へ出征。河北省太沽に上陸。満州・中ソ国境の岡山県満蒙開拓団の男子からも歩兵などに召集開始。		
1938（昭和 13）年	岡山県満蒙開拓青少年義勇軍（数え年 16～19 歳の青少年）が召集され、訓練ののち満州・中ソ国境地域に送出。その後さ	台児荘の戦い	

	らに、現地から歩兵などに召集開始。		
3月～4月7日	日中戦争・台児荘の戦いに参戦。	台児荘の戦い	
4月7日～6月7日	日中戦争・徐州会戦に参戦。	徐州会戦	
6月16日	岡山歩兵第110連隊が発足。	留守第10師団で第110師団を発足。 岡山歩兵第110連隊、姫路歩兵第139連隊、松江歩兵第163連隊、鳥取歩兵第140連隊などで編成。	
8月	漢口作戦に参戦。	漢口作戦	
8月28日	六安で戦闘開始。		
9月6日	固始で戦闘開始。		
10月12日	信陽、徳安で戦闘開始。		
1939（昭和14）年 9月		第二次世界大戦勃発 ナチス・ドイツ、ポーランドに侵攻	
10月25日	中国より一度帰還。ナチス・ドイツのポーランド侵攻を受けて、対ソ戦に備える。		
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 2600、馬匹 30 連隊長：毛利末広大佐（1938年7月15日～）		

	(1126 名戦死。)		
12 月	連隊長：宮下健一郎大佐（1939 年 12 月 6 日～）		
1940（昭和 15）年	再度満州国へ移動、三江省佳木斯（チャムス）に駐屯し、東満の警備に当たる。対ソ戦に備え、情報収集。	第 10 師団、満州国三江省佳木斯（チャムス）に駐屯、東武満州の警備に当たる。師団司令部参謀部情報班、対ソ戦に備え、情報収集。	
1941（昭和 16 年） 12 月 8 日		大東亜戦争、フィリピンの戦い勃発 日本軍、真珠湾攻撃およびルソン島クラーク空軍基地攻撃	
12 月 22 日～1942 （昭和 17）年 1 月 2 日		第 14 軍、ルソン島上陸、マニラ占領	
12 月		当初、フィリピン人は日本軍を解放軍として歓迎。日本軍に食糧調達（米、塩、馬、牛）。日本軍は略奪せず購入。	アメリカ極東陸軍（U.S. Army Forces Far East, USAFFE、米陸軍・米空軍・フィリピン陸軍の連合軍）編成。司令官にダグラス・マッカーサー。
12 月 26 日			マニラ市、無防備都市宣言を発し、日本に降伏

1942（昭和17）年 2月	なおも対ソ戦に備え、満州防備。	第14軍、マニラ市民および農村のフィリピン住民からの食糧買占めと略奪を開始。マニラ市街を通行中の市民の食糧カゴも略奪。フィリピン人餓死者が現れるようになる。	フィリピン民間人の抗日ゲリラ部隊が各地に組織される。
2月	倉敷絹織（クラレ）・陸軍省経理部の鹿内信隆、第14軍幹部将校よりマニラ大学の女子学生への強姦・虐殺の自賛報告を受ける。慰安所の設置に奔走。南方軍、「強姦・虐殺ならず。慰安所を利用せよ」と通達。南方進出予定の岡山の連隊にも綱紀粛正の命下る。	第14軍、米軍との戦闘のみならず、抗日ゲリラ討伐にも追われるようになる。現地の第14軍将校、歩兵各連隊にマニラ市民・マニラ女性の虐殺・強姦を許可。	米軍、マニラ市民の抗日感情を利用し、武器・弾薬を与えて組織・訓練。抗日ゲリラ部隊を拡充。
2月6日			ルイス・タルクがフクバラハップ（抗日ゲリラ部隊の一つ）を組織して抗日参戦。フィリピンの共産主義者層に抗日戦線が広がる。米軍は警戒。
5月10日～6月9日		米軍、ビサヤ・ミンダナオで降伏し、日本軍勝利、フィリピン全土を占領	
6月5日～7日		ミッドウェー海戦、米軍の勝利	
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 2500、馬匹 30 連隊長：田島正男大佐（1940 年 12 月 19 日～）		

1943（昭和18）年 1月	歩兵第10連隊、第14軍より「フィリピン人、全日本軍を歓迎」、「現地での食糧調達、フィリピン人の協力により著しく容易」の旨の虚偽の報告を受ける。	米軍降伏後、マニラ市民および農村のフィリピン住民からの食糧買占めと略奪を拡大。フィリピン人の餓死増加。	米兵の残党がユサップエ・ゲリラとして、フィリピン人と共に抗日ゲリラ戦を展開。
5月		御前会議でフィリピンを独立させる。日本軍の傀儡国家。	
10月14日		フィリピン第二共和国成立。日本軍の傀儡国家。大統領にホセ・ラウレル。	
1944（昭和19）年 1月		第14軍、米軍およびフィリピン人ゲリラ部隊の猛攻により弱体化。	抗日ゲリラ部隊、フクバラハップ、ユサップエ・ゲリラのゲリラ戦によってルソンの戦況が一転。米正規軍が挽回。
2月～6月	第3大隊に対し南方方面抽出の命下る。まずサイパン島へ。次いでヤップ島の部隊増強のため、ヤップ島に移動・加勢。	日本軍、サイパン・マリアナ・レイテ・ルソン・ミンダナオなど南方へ兵力集中。第14軍を増強。	
3月	第3大隊、ヤップ島で米軍と戦闘。島民とは協力体制となり、農業・漁業を共にする。	マニラ市街地での第14軍幹部将校による強姦・虐殺の命が横行。現地の歩兵、命令の実行や拒否・自決。	

4 月		第 14 軍、フィリピンの日本兵の急増により軍票を乱発し、フィリピン人からの食糧買占めと略奪を強化。多数のフィリピン人が餓死。	ユサップ・ゲリラなど、フィリピンの戦い前半戦で敗北した米軍歩兵の残党、進軍してきた米正規軍に再合流開始。
6 月	依然として対ソ連戦に向け満州防備。	第 14 軍および各新聞、南方進出予定の師団・歩兵連隊に対し、フィリピン人の日本軍歓迎と食糧難皆無の旨を引き続き捏造・報告。	
6 月 15 日～7 月 9 日		サイパンの戦い、米軍の勝利	
6 月 19 日～20 日		マリアナ沖海戦、米軍の勝利	
7 月	ヤップ島の第 3 大隊、米軍来襲に備えつつ、島民との生活を継続。 満州の連隊主力、サイパン・マリアナで日本が勝利と把握。フィリピン人抗日ゲリラやユサップ・ゲリラを、サイパン・マリアナから敗走してきた米軍の残党と判断。	第 10 師団、台湾に移動し守備につく。移動時、山口の下関を經由し、一部の連隊は家族と一時再会。	米軍、ヤップ島には上陸せず、フィリピン攻略を模索。
7 月 26 日～8 月初頭	連隊主力の南方方面への動員がかかる。松江歩兵第 63 連隊などと共に台湾防備、続いてルソン島への移動の方針が連隊・大隊レベルで共有される。連隊本部	第 14 軍により、満州・台湾駐屯の師団・連隊に次々と南方方面への動員がかかる。米軍のレイテ・ルソン上陸に備え、逆上陸部隊を編成。	

	附畑野稔中尉、連隊長の命でソ連から連隊に復帰し、連隊副官に。連隊長・田島正男大佐、連隊副官・畑野中尉、連隊の南方動員を準備。		
7月28日		日本軍大本営、第14軍を第14方面軍に昇格させる方針を決定。	
8月4日	第14方面軍下に配属。	第14方面軍を正式に創設。 司令官：黒田重徳中将	
8月	満州を出発。「米軍の侵攻に恐怖するフィリピン住民が日本軍増強を歓迎」の報を受ける。連隊本部、フィリピンの戦況不利を把握する。当初、配属部隊には伝えず。	第8師団・第10師団等をフィリピン戦線に投入。逆上陸部隊として再編。	フィリピン人抗日ゲリラやユサッフェ・ゲリラを再編して、米正規軍の先導を訓練。
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 2300、馬匹 30 連隊長：田島正男大佐 (満州出発直前に第4、第8、第12中隊を廃止、ヤップ島進出中の第3大隊の穴を埋めるため、第3大隊を新設。通信、作業、速射砲、連隊砲を中隊に。各大隊に機関銃中隊、大隊砲小隊を設置。)		
9月	台湾のキールンに移動、台中に駐屯。この頃、台湾の各連隊歩兵、フィリピン戦	第8師団主力、ルソン島のサン・フェルナンドに上陸。	亡命政府フィリピン・コモンウェルス、米軍の支援で勢力挽回。

	線の苦境を知り始める。連隊をフィリピンまで運ぶだけの船がなく、ここから三ヶ月待機。この間、台湾防備。この時点では、ルソンよりもレイテやミンダナオに上陸の方針。連隊本部は当初、配下部隊に「南方転進」とのみ伝え、フィリピンへの転進およびフィリピン戦線苦戦は伝えず。		
9月26日		第14方面軍司令官に山下奉文大将着任。	
9月末～10月中旬		第14方面軍司令官・山下大将、ルソンへの兵力・物資結集を命じる。大本営はレイテへの結集策。兵力・物資の移動・配備が大混乱。レイテで敗色濃厚に。	
10月19日		大本営および海軍、台湾沖航空戦で大戦果、米軍機動部隊のほとんどを撃沈と発表。陸軍が鵜呑みにする。	
10月20日～12月		レイテ島の戦い、米軍の勝利	
10月23日～25日	連隊長、海軍が台湾沖で大勝利、レイテでも圧勝の公算の報告を受ける。レイテ・ミンダナオへの加勢の準備に入る。	レイテ沖海戦、米軍・オーストラリア軍の勝利	

11 月	連隊長：岡山誠夫大佐（1944 年 11 月 15 日～） 第 3 大隊長：田村英雄少佐	第 23 師団、ルソン島へ移動開始。米軍の魚雷攻撃により、上陸までに 3 万名中 4000 名が戦死。 大本営（レイテ・フィリピン全土奪回策）とバギオの第 14 方面軍（レイテ放棄・ルソン死守策）、依然として意見衝突。	米軍、抗日ゲリラ部隊を増強。マニラでの日本の歩兵の掃討作戦を強化。
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 3162（人員増強）、馬匹 30		
12 月 13 日～15 日	連隊本部、第 10 師団配下にて、なおもレイテ・ミンダナオ上陸準備。	第 10 師団、なおもレイテ・ミンダナオ上陸準備。レイテでの敗北を知らされていない連隊・大隊・中隊多くあり。	米軍、ミンドロ島に上陸。
12 月中旬	連隊全体がフィリピンへの移動を把握。ただし、米軍の装備・戦法の情報や現地の地図は得られず。	ミンドロ島の戦い勃発	
12 月中旬	上陸先をルソン島に変更。5 隻の船団を組み、台湾の高雄を出発。多くの日本の輸送船が米軍の戦闘機や潜水艦に撃沈され、かつ暴風雨吹き荒れる「魔のバシー海峡」を越え、ルソン島を目指す。師団中、最も速度の遅い船で、最も遅れて上陸。米軍の高速の魚雷は、本連隊の前	第 14 方面軍司令官・山下大将、米軍のミンドロ島上陸により、第 10 師団によるサンホセ北方高地およびプンカンの制圧・守備の方針を決定。第 10 師団にルソン島への上陸・転戦を命令。第 10 師団、司令部陣地が決まらないまま上陸。方面軍の指令で、急	

	を行く日本船を爆沈させるばかりで、速度の遅い本連隊の船には当たらず。	遽サンホセに駐屯、すぐにバギオへ。師団配下の連隊・部隊、順次上陸。	
12月21日		岡山・工兵第10連隊第1中隊がマニラに上陸。	
12月23日	船団の先頭を行く歩兵第10連隊第2大隊・第63連隊第3大隊等の乾瑞丸、リングエン湾沖にてフィリピン・ルソン島上陸直前に米軍の魚雷攻撃で撃沈。第5中隊長藤井憲大尉を含む約250名戦死。壊滅状態でルソン島の北サン・フェルナンドに上陸。	乾瑞丸撃沈。約1200名戦死。姫路歩兵第39連隊主力はバタアン半島に、松江歩兵63連隊は北サン・フェルナンドに上陸。	
12月24日～26日	残る各連隊・部隊、乾瑞丸撃沈を知らず。歩兵第10連隊は、サン・フェルナンド（リングエン湾沿岸）からアパリ（ルソン北端）までの沿岸に上陸。同連隊の多くを乗せた江の島丸（江島丸）は、船団中最も遅くアパリ（ルソン北端）に上陸。（三日三晩徹夜での揚陸作業の際、連合軍機動部隊の砲撃を受け、半数～3分の2の糧秣・物資・弾薬・医薬品・馬・トラック等は揚陸不能。人員のみ全員上陸。輸送船は台湾へ帰還せよとの無電を		

	受け、連隊長も出港許可。船はそのまま出港し、台湾に帰還。）		
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 3200（人員増強）、馬匹 20		
12 月 27 日～1 月	自動車移動を諦め、多くの糧秣・弾薬を海岸線に残し、徒歩でバギオ・サンホセ・マニラ方面に向けて移動。昼は密林内で待機。夜に、竹などに火を付け松明とし、移動。小野一臣連絡将校、バギオの第 10 師団司令部に派遣され、プンカン以南の戦況を報告。内陸部までの物資移動は 2 月 10 日頃までかかった。	米軍、爆撃に加え、幹線道路を抑え、橋を落として、上陸した日本軍部隊の移動を妨害。	
12 月末	プンカン守備隊 （隊長：井上恵少佐）を配置。 第 105 師団（勤兵団）臨時歩兵第 2 大隊（井上大隊）（第 10 師団指揮下） 第 10 師団歩兵第 10 連隊第 2 大隊（第 6・第 7 中隊欠、集成第 8 中隊配属）（内藤大隊） 第 10 師団歩兵第 39 連隊第 1 中隊（吉田中隊） 第 10 師団歩兵第 63 連隊第 5 中隊（三橋中隊） 第 26 師団独立歩兵第 11 連隊基幹 2 個中隊（津田支隊） 第 10 師団野砲兵第 10 連隊第 1 大隊（半中隊欠）（赤座砲兵大隊） 独立速射砲第 26 大隊第 3 中隊 独立速射砲第 21 中隊 1 個小隊		
12 月末	プンカンの戦い勃発		

12 月末	連隊主力（第 6・7・8 中隊と第 3 大隊を除く）は、第 105 師団に配属され、バガバックにて警備、掃討作戦。	マニラ・ルソン南部、第 41 軍・第 8 師団指揮下の歩兵第 17 連隊に対し、抗日ゲリラ部隊が襲撃開始。 大本営、ようやくレイテを全面放棄し、第 14 方面軍にルソン死守を命じる。 第 8 師団参謀部付の小野田寛郎少尉ら、残置諜者及び遊撃指揮の任のため、ルバング島に着任。米軍を監視。	抗日ゲリラ部隊およびユサップエ・ゲリラ、マニラを攻略し、ルソン島中部へ進出・北上。残存する米軍歩兵を先導し、前線で戦闘。
1945（昭和 20）年 1 月	第 2 大隊は、サンホセで第 30 師団から岡山出身者を編入し、第 5 中隊生存者と共に第 8 中隊を新設、正式にブンカン守備隊に配属。	第 10 師団、第 14 方面軍に対し、サンホセ・ブンカン現地の地形の不利のため陣地配置不適の旨を報告し、背後のバレテ峠・サラクサク峠での陣地配置を要請。方面軍、あくまでも第 10 師団にサンホセ・ブンカン死守を命令。方面軍は丘陵地・平地の前線陣地を主陣地とする強硬策、現地の師団は地理的に有利な山岳地帯に下がって布陣し、米軍を引き込む策。	
1 月 4 日			米軍航空隊、マニラ～リングエン湾を爆撃開始。

1月6日～9日	ルソン島の戦い勃発 米軍、空母12隻を率いてリングエン湾来襲、ルソン島サン・フェルナンドに上陸。		
	第14方面軍 （司令官：山下奉文大将） 開始時の編成：総兵力約30万名 ◆尚武集団 （北部） 総兵力約15万2000名 山下奉文大将…第1師団（玉）、第10師団（鉄）、第19師団（虎）、第23師団（旭）、第103師団（駿）（独立歩兵8個大隊基幹）、第105師団（勤）（独立歩兵8個大隊基幹）、戦車第2師団（撃）、独立混成第58旅団（盟）、独立混成第61旅団（パプヤン諸島）、第4航空軍地上部隊、第35軍（尚）、兵站部隊 ◆振武集団 （マニラ北東地区） 総兵力約10万5000名 横山静雄中将…第41軍、第8師団、第105師団（尚武集団に転出）、マニラ防衛隊、海上支援兵力 ◆建武集団 （マニラ北西地区） 総兵力約3万名 塚田理喜智中将…第1挺進集団、永吉支隊（第10師団歩兵第39連隊基幹）、陸海軍航空部隊		アメリカ極東陸軍 （司令官：ダグラス・マッカーサー） 総兵力約18万名 米第6軍、米第8軍、英豪連合軍、連合国空軍、連合国海軍（第7艦隊主力）
1月上旬		工兵第10連隊第1中隊、バレテに移動・加勢。 第14方面軍は、ロスバニョス農科大学（現フィリピン大学農学部）の校舎をロスバニョス捕虜収容所とし、藤兵団および歩兵第17連隊が米兵捕虜や抗日ゲリラ兵、フィリピン人女性を連行・収容開始。	ルソン島の制空権・制海権、ほぼ米軍の手中に。 フィリピン人抗日ゲリラ、米軍を歓迎。ゲリラ参加者が急増。米軍歩兵を先導し、前線で戦闘。

1 月 12 日	第 2 大隊第 6 中隊、バレテに到着。第 10 師団予備隊として、歩兵第 63 連隊の機関銃小隊を配属する。持久戦を企て、陣地・蛸壺（個人用塹壕）・散兵壕（塹壕）・洞窟を構築。		
1 月中旬・下旬	連隊、国道 5 号線などの幹線道路の防御態勢を整える。	第 23 師団、独立混成第 58 旅団、戦車第 2 師団重見支隊（支隊長：重見伊三雄少将）が反撃。重見支隊長戦死。	米軍、大型ブルドーザーで山肌を切り開き、自動車道路を造りながら山岳・峠を乗り越えて進撃。従来の国道 5 号線をほとんど通らず進撃可能。
1 月下旬		第 10 師団、再度第 14 方面軍にサンホセ・プンカンの地理的不利の現状を報告し、背後のバレテ峠・サラクサク峠での陣地配置を要請。山下奉文大将、現地地形を見ないまま聞き入れず、逆襲を命じ、戦況悪化。方面軍、各師団、各連隊で見解相違深まる。	
1 月 25 日		歩兵第 17 連隊長・藤重正徳大佐、連隊の中隊長以上に集合を発令し、抗日ゲリラと協力住民の粛清を命令。連行部隊と虐殺部隊とを組織し、バタンガス州から順次粛清を開始。 （女性・子供を含めて殺害を指示。2	

		月 25 日発令の証言があるが、事実誤認と考えられる。)	
1 月 31 日～2 月 2 日			米軍、ナスグブに上陸。タガイタイに落下傘部隊を降下させる。
2 月 3 日		マニラの戦い勃発	
2 月	第 10 師団平林克巳兵站参謀、歩兵第 10 連隊に第 14 方面軍からの斬込命令を伝達。連隊は斬込挺身隊を組織。	第 14 方面軍山下大将、第 10 師団にようやくバレットへの主陣地変更を容認。ただし、快諾せず、あくまでもブンカンに至る広域の布陣を命じる。日本本土決戦を遅らせるため、ルソンの日本軍に「自活自戦・永久抗戦」を命じ、斬込（肉弾攻撃）命令を開始。第 10 師団平林克巳参謀、配属連隊に第 14 方面軍からの斬込命令を伝達。自身も斬込挺身隊長として約 60 隊を指揮。その他各師団・連隊も斬込挺身隊を組織。	親日フィリピン人が続々と抗日ゲリラに転じ、現地の日本兵は略奪以外の方法による食糧調達が困難となる。各地でゲリラが米軍歩兵を先導。
2 月上旬	持久戦と斬込を併用する「自活自戦・永久抗戦」を開始		

2月上旬		日本軍、すでにフィリピン全土で敗色濃厚。島の糧秣・物資は枯渇し、補給もほぼ途絶える。第14方面軍および各師団・連隊、日本本土決戦を遅らせるためだけの戦闘継続の方針。配下の大隊・中隊・小隊歩兵に対しては、斬込の士気を鼓舞するため、なおもフィリピン戦勝利の可能性を示唆。	
2月9日	ブンカン守備隊配属の第2大隊（内藤大隊）第8中隊、連合軍と銃撃戦開始。		
2月12日	第7中隊が参戦。		
2月13日	第8中隊、斬込（肉弾攻撃）。壊滅。		
2月13日～15日	第7中隊、斬込（肉弾攻撃）。佐野満寿二中隊長、負傷し、自身の部隊から落伍。部隊も壊滅。生存者4名。		
2月中旬		小磯國昭首相および大本営、ルソンの持久戦に業を煮やし、徹底攻勢を指示。	
2月中旬	斬込を攻撃の中心とする先攻型の「自活自戦・永久抗戦」に方針転換		

2月中旬		日本軍の猛反撃により、一時的に米軍を後退させる。戦車第2師団全滅。第14方面軍、一部連隊のフィリピン人粛清に対し、事実上の黙認に転じる。第17連隊、粛清のターゲットをバウアン、タール、リパの抗日ゲリラおよび住民に拡大。	スズカ峠とバレテ峠の中間地帯に米軍進攻。日本軍の猛反撃により、バレテ方面へ転換、兵力集中。
2月23日		藤兵団長兼歩兵第17連隊長・藤重大佐、兵団と連隊に徹底逆襲を命じる。	米第11空挺師団、ユサップエ・ゲリラ、抗日ゲリラの連合軍、ロスバニョス捕虜収容所の米捕虜・抗日ゲリラ・フィリピン人女性の救出作戦を開始。2500名を救出。
2月25日早朝	陣地内に敵兵進攻。内藤大隊長、斬込（肉弾攻撃）で爆死。第2機関銃中隊長の武下圭助中尉が大隊長となる。（ただし、全身に迫撃砲弾の破片を受けており、担架上から大隊指揮。）		
2月末	敵軍進攻のため、武下圭介大隊長の担架移動困難。指揮を断念し、部下に後退と指揮交代を命じ、自決。梅村友之軍医中尉、武下大隊長に忠義を尽くし、自決。	ミンドロ島の戦い、米軍の勝利	

3 月～	歩兵第 10 連隊、飢餓状態に陥る。留守のフィリピン人民家を狙って米・水牛などを盗む。第 10 連隊連隊本部畑野稔中尉、連隊の食糧調達を指揮。フィリピン民間人の飢餓が深刻化する。抗日ゲリラの到達は少なく、栄養失調、餓死、病死が多。	歩兵第 17 連隊、飢餓状態に陥る。留守のフィリピン人民家を狙って米・水牛などを盗む。フィリピン民間人の飢餓が深刻化する。鉢合わせの場合は、虐殺。	米軍、バレテを目指して進撃。 また、第 8 師団日本兵に対し、抗日ゲリラを利用したハニートラップ作戦を開始。一般民家のフィリピン人女性・主婦（抗日ゲリラ兵の妻）に、日本兵に対し食事を提供させ、その間に米軍・抗日ゲリラが民家を取り囲み、日本兵を襲撃。
3 月 3 日		米軍、マニラを完全制圧	
3 月 5 日	米軍、プンカンを完全制圧		
3 月 5 日～	第 2 大隊、壊滅的打撃のため、第 6・7 中隊を残して解体。他の大隊・中隊に編入。		
3 月 6 日	連隊本部、輜重兵第 10 連隊第 2 大隊（米倉大隊）を歩兵に再編し、妙高山布陣を命じる。		
3 月 8 日	米倉大隊、妙高山到着・布陣。		
3 月 11 日	米倉大隊、戦闘開始。		
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 2800、馬匹 15 （米軍戦史は、プンカン守備隊を主軸とする日本軍戦死者を 1250 名と記録。）		

	(米軍は、戦死 40 名、負傷 165 名。)		
3 月上旬	バレテ峠の戦い勃発		
3 月 10 日～		第 14 方面軍主陣地は各師団主陣地に、各師団主陣地は各連隊に対し、陣前抗戦を命じる。大本営、方面軍、各師団、各連隊との間で見解相違深まり、さらに戦況悪化。	
3 月中旬	第 6 中隊、松江歩兵第 63 連隊の機関銃小隊を従えて、師団予備隊としてバレテ峠で待機。	歩兵第 17 連隊、ゲリラ戦を展開。抗日ゲリラ部隊と全面衝突したため、北部の歩兵第 10 連隊陣地へのゲリラ侵入が抑えられる。	
3 月中旬	米軍、日本陸軍第 10 師団に砲撃開始。 バレテの歩兵第 10 連隊第 6 中隊陣地に来襲。要山付近で手榴弾戦・接近戦で反撃。		
3 月中旬	第 6 中隊第 1 小隊長・松本武中尉負傷。	松江歩兵第 63 連隊、再前線で陣前出撃開始。	
3 月中旬	第 6 中隊第 1 小隊第 2 分隊（長：平野正男伍長以下 5 名）、夜襲・斬込し全滅。	日本軍、砲兵部隊壊滅の中隊・小隊が継続発し、組織的行動が次々と不能に。第 14 方面軍・師団・連隊主陣地からの指揮系統も順次機能しなくなる。砲兵壊滅部隊は、斬込・夜襲で逆襲する	米軍、集中砲撃のあとに歩兵や抗日ゲリラを一気に敵陣に送り込む余裕の戦闘。

		ほかなくなる。	
3月中旬	ブンカンの第2大隊、玉砕し壊滅。	第14方面軍、米軍によるブンカン陥落後もブンカン守備隊に撤退・転進命令を出さず、守備隊が壊滅・崩壊。	
3月10日～18日	第1大隊を中心とする連隊主力が、第105師団を離れ、ルソン島バレテ峠に到着し、第10師団に復帰。陣地・蛸壺（個人用塹壕）・散兵壕（塹壕）・洞窟を構築。以後、半年間に渡り米軍と激闘。		
3月18日	第3大隊（大隊長：田村英夫少佐）がバガバックからバレテに到着。第3大隊は歩兵第63連隊に配属され、第63連隊第2大隊（根本大隊）の陣地奪回作戦を支援。		
3月10日～18日	連隊主力および第3大隊に米軍が大規模砲撃。いくつかの小隊消滅。		
この時点の鉄 5448 の兵力 （歩兵第63連隊に 臨時配属の第3大隊 を含む。）	総員約2300、馬匹10 連隊長：岡山誠夫大佐 （第1大隊、第2大隊の第6中隊、連隊 直轄部隊が岡山連隊長の指揮下。）		

3 月下旬	第 1 大隊、冑山を占領。 第一線（最前線）：第 1 中隊、第 3 中隊 第二線（後方）：第 2 中隊	第 10 師団平林克巳参謀指揮の各斬込隊、主陣地とボネの間での逆襲で大敗。第 10 師団司令部と第 14 方面軍司令部、主陣地転進の方針。	米軍の圧倒的兵力により、米軍を先導する抗日ゲリラ部隊は自然に減少。また米軍は、フィリピン全土での勝利の公算のため、不要となった抗日ゲリラ部隊の処分やフクバラハップへの弾圧を開始。
3 月下旬	第 1 大隊、斬込（肉弾攻撃）。一時、米軍の砲撃に対してわずかに戦果を挙げる。大隊の 3 分の 1 が、被弾して死亡、または爆死、自決、餓死、病死。	各師団・連隊の壊滅部隊から落伍した遊兵を招集し、戦車特別攻撃隊を編成、戦線に投入開始。	
3 月 26 日		沖縄戦開始、フィリピン戦線の当初の目的が崩壊。	
3 月 28 日	第 6 中隊、全滅覚悟の反撃により米軍が一時後退。中隊約 20 名被弾死、爆死。		
4 月	歩兵第 10 連隊・歩兵第 17 連隊陣地、栄養失調・飢餓状態に陥り、脚気・餓死者増加。シダ、雑草、木の枝、猿の手足・脳、川ガニ、カタツムリ、ナメクジ、トカゲ、ヘビ、シラミ、ウジ、ゴミ、抗日ゲリラやフィリピン人の死肉などを食して生き延びながら斬込。稀に魚の豊富な川に行き着いた際は、手榴弾を投げ込み、浮かせては食した。この頃、米軍は、一日に数千発の砲爆撃で猛撃。		米軍、バレー峠に差し掛かる。歩兵の斬込に対しては、電流を流した有刺鉄線を巡らせて対抗。
4 月	第 3 大隊が、第 63 連隊第 2 大隊の支援を断念・撤退。	大本営、方面軍、師団以下の連隊・部隊との相互の指揮・命令系統は崩壊。第 10 師団司令部、天王山から要山へ移動。	バレー付近での全面決戦開始。米軍、フィリピン全土での勝利の公算のため、不要となった抗日ゲリラ部隊の処分やフクバラハップへの弾圧を本格

			化。
4 月 5 日～	第 1 大隊、妙高山の輜重兵第 10 連隊第 2 大隊（米倉大隊）を支援し、斬込（肉弾攻撃）。大隊の 3 分の 1 が、被弾して死亡、または爆死、自決、餓死、病死。		
4 月 5 日～6 日	上陸時の輸送船爆沈と連日の激闘で壊滅状態の第 5 中隊、大隊本部に支援要請。支援可能部隊おらず。		
4 月 12 日～		フランクリン・ルーズベルト大統領死去。以後、第 8 師団・第 10 師団司令部参謀部情報班、「ルーズベルト死去により米本国から米軍に停戦命令が出た」、「ルーズベルト死去により休戦協定を提案する」などのビラを作成、ばらまく。実際は停戦の意志なく、反撃の術策として用いたのみ。	

4 月 15 日	第 3 大隊、金剛山制圧を目指して肉弾戦を展開。第 9 中隊長・田辺宣夫中尉、第 10 中隊長・平野実良中尉、第 11 中隊長・小谷笹市大尉が戦死。大隊の生存者約 50 名。		
4 月 16 日～17 日		第 14 方面軍司令官山下奉文大将、バギオを放棄、バンバンへ移動。配下師団・連隊に、バギオ陥落後も「自活自戦・永久抗戦」を継続するよう指示。沖縄戦勃発は伝えず。	
4 月 19 日～25 日	妙高山の米倉大隊と第 1 大隊が壊滅。第 6 中隊が北部妙高山の守備強化のため移動（第 6 中隊生存者約 80 名）。		
4 月 20 日	全滅状態の第 1 大隊、岡本誠一中隊が斬込（肉弾攻撃）。岡本中隊長、一人抗戦して生還。	妙高山の歩兵第 10 連隊壊滅により、工兵第 10 連隊第 1 中隊が妙高山死守の命を受け、孫山攻略から狙う。	
4 月 24 日～5 月末	連隊の一部、転進命令を受け、後退を開始。本部附畑野稔部隊・小野一臣部隊、連隊の後退援護を担って疲弊・壊滅。（小野部隊、24 名で転進開始、8 月中旬時点の生存者 7 名。）		
4 月 23 日～26 日	米軍、バギオを完全制圧		

	第 14 方面軍司令部、バギオを全面放棄		
4 月 24 日	妙高山の残余兵（基幹の米倉大隊 8 名ほか十数名のみ）にも転進命令。鉄道第 8 連隊指揮下に入りつつ、転進。		
4 月 28 日～5 月 7 日	岡山連隊長、徹底抗戦を命じる。残る第 1 大隊第 2・3 中隊、約 50 名のみで孫山付近にて最後の斬込（肉弾攻撃）。大隊が壊滅。		
4 月 29 日	連隊は、第 1 機関銃中隊福田小隊の援護のもと、保有する全火力・砲弾により最後の反撃。 （重機関銃 2、軽機関銃 4、擲弾筒 4、軽迫撃砲 1）	歩兵第 17 連隊長・藤重正徳大佐、連隊の総攻撃・玉砕計画を第 14 方面軍に電報。方面軍、玉砕を許さず、持久戦および転進を命令。	バレテ峠の日本軍陣地に米軍進攻。
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 1500～1800、馬匹 0		
5 月 8 日	バレテ峠の日本軍陣地が陥落 米軍、親山・妙高山を制圧し、バレテ峠まで進攻。		
5 月 10 日	孫山の守備を歩兵第 63 連隊に交代。	工兵第 10 連隊第 1 中隊、歩兵第 10 連隊と共に、孫山の守備を歩兵第 63 連隊に交代。工兵中隊、要山へ転進。	

5 月 12 日	第 3 大隊、金剛山防御戦の最中に転進命令を受ける。歩兵第 63 連隊の指揮を外れ、帰山に転進し、第 10 連隊に復帰。		
5 月中旬		歩兵第 17 連隊、バナハオ山に転進。餓死者が続出。	
5 月中旬	後続の後退部隊のため、木に目印を付け、一部の要員を残しながらの後退。一方で、栄養失調・餓死増加。戦友・日本兵どうしの人肉食が見られるようになる。戦友の亡骸を切り取って焼く者もいれば、痩せ細った戦友を自ら撃ち殺して食する者も出た。		
5 月 24 日	第 3 大隊が第 10 師団より独立歩兵第 11 連隊基幹（津田支隊）の指揮下に入ること命じられ、帰山から龍山へ移動。		米軍、サラクサク峠に進出。
6 月 1 日	米軍、バレテを完全制圧、ルソン島作戦の終了を宣言、サンタフェまで進攻		
6 月 2 日		第 10 師団、第 14 方面軍との通信途絶、カシブに転進。工兵第 10 連隊第 1 中隊、師団最後尾を守備。	
6 月 6 日	歩兵第 10 連隊等に対し、ルソン島東海岸方面、まずはカシブへの転進命令下る。バレテより撤収・転進。		
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 1000～1200、馬匹 0		

6月7日～27日	鈴ヶ峠・鈴ヶ谷に連隊の生存兵集結。アルワット河谷（マガット河上流）からママヤンへ。食料発見による一週間滞在中、連隊旗および臨時第5野戦補充隊松尾少佐、岡本誠一中隊が合流。その後、ビノンへ。	第10師団、カガヤン河密林に転進開始。第10師団司令部、歩兵第10連隊が滞在中のママヤンを通過。	
6月	第3大隊、戦闘中。	歩兵第17連隊、餓死と斬込で、当初の3000名から1000名に激減。連隊内のフィリピン人虐殺部隊も、ほぼ機能しなくなる。	
6月	栄養失調・飢餓状態が蔓延、餓死者増加。ジャングル内を戦友の亡骸を交わしつつ歩く状況。亡骸の手の小指を切っては、遺族へ渡すため持ち帰った。また、栄養失調のため転進を諦めた歩兵は、行軍から自ら落伍し、後続の転進歩兵のために靴を脱いでおき、近辺で自決した。後続の歩兵は、戦友の意を酌んでその靴を履き、転進を続けた。餓死・自決後の亡骸から靴を脱がせて取った場合には、足首・肉が付いてきた。一方で、極度の飢餓・栄養失調のため邪念が生じて戦友の肉を食した日本兵を、これに抵抗する日本兵が殺害することもあった。妄想・幻覚を見る者が増え、台湾や内地まで泳ごうとする歩兵を上官が制止することがあった。		
6月11日	第3大隊、壊滅。生存者約40名のみで第10連隊に復帰。		
6月14日		歩兵第63連隊が壊滅。	

6月23日		ルソン島北端のアパリに連合軍が空挺降下し激闘、第103師団壊滅。	
6月28日	連隊、ブア到着。		
6月29日		岡山大空襲。	
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 550～800、馬匹 0 (バレテ峠付近の兵士数 600～1000)		
7月8日	カシブ到着。		
7月10日	カシブを出て、イゴロット村を通過。		
7月16日～	カガヤン川に架橋、アダラム川を横断。 その後、川を下ったり渡ったりする際には筏を多用。		
7月22日	芋山到着。		
7月25日	芋山出発。		
7月28日～8月下旬	カガヤン河畔のディビンテンやマデラに到着。食料発見のため一ヶ月滞在。		
8月5日		歩兵第63連隊、ピナパガンに敗走。 生存者 150 名。	
8月6日・9日			広島・長崎に原爆投下。
8月14日	日本、御前会議でポツダム宣言の受諾を最終決定		
8月14日～15日		宮城事件	

8 月 15 日	玉音放送（終戦詔書） 米軍、ルソン島の戦い公式終結を宣言		
8 月 15 日時点	第 14 方面軍 （司令官：山下奉文大将） 敗戦時の編成： ◆尚武集団 （北部） 山下奉文大将…第 1 師団（玉）、第 10 師団（鉄）、第 19 師団（虎）、第 23 師団（旭）、第 26 師団（泉）、第 103 師団（駿）（独立歩兵 8 個大隊基幹）、第 105 師団（勤）（独立歩兵 8 個大隊基幹）、戦車第 2 師団（撃）、第 4 飛行師団、独立混成第 55 旅団（管）、独立混成第 58 旅団（盟）、独立混成第 68 旅団（星）、第 1 挺進集団、第 4 航空軍地上部隊、第 2 航空通信団、第 35 軍（尚）、兵站部隊 ◆振武集団 （マニラ北東地区） 横山静雄中将…第 41 軍、第 8 師団、第 105 師団（尚武集団に転出）、マニラ防衛隊、海上支援兵力 ◆建武集団 （マニラ北西地区） 塚田理喜智中将…第 1 挺進集団、永吉支隊（第 10 師団歩兵第 39 連隊基幹）、陸海軍航空部隊		
8 月 15 日～	歩兵第 10 連隊の一部中隊・小隊、終戦を知らず。連合軍のビラに遭遇した者も、これを信用せず、あるいは無視して、反撃を継続。ビラで草を巻き、葉巻にして吸った。	歩兵第 17 連隊・第 39 連隊・第 63 連隊の一部中隊・小隊、終戦を知らず。連合軍のビラに遭遇した者も、これを信用せず、あるいは無視して、反撃を継続。ビラで草を巻き、葉巻にして吸った。	連合軍および一部の抗日ゲリラ部隊、落下傘などでビラをばらまき、ルソンの日本兵に終戦を伝達。抗日ゲリラ、停戦意志のないルソンの日本兵に攻撃再開。
8 月 16 日	政府、陸海軍に停戦命令。		

8月19日		第14方面軍司令官・山下大将、停戦命令を受容。各師団・部隊へ連絡開始。	
この時点の鉄 5448 の兵力	総員約 350～500、馬匹 0 (バラングク到着の日本兵数 170～600)		
8月中旬～下旬	ピナパガンを通過、バラングアグへ。連隊長が到着し、敗戦している可能性を報告。なおも各中隊・小隊、戦闘を継続し、爆死、自決、餓死が多発。	ルソン中部の各部隊、抗日ゲリラに応戦の体力なし。 米軍により日本軍各部隊解体。ロスバニョス捕虜収容所やバタンガス捕虜収容所に収容開始。	フィリピン人抗日ゲリラおよび米軍ゲリラ（ユサップエ・ゲリラに、さらに新規の米兵ゲリラが参戦）、ルソン島北部に進出。勝利・停戦した米正規軍との協力関係のない、単独での進撃が始まる。
8月下旬	ルソン北部に進攻した抗日ゲリラ部隊に応戦。岡本誠一中隊、小野一臣中隊、佐野満寿二中隊、松尾岩雄野戦補充隊の一部が最後まで抗戦、玉砕。各中隊長と数名の歩兵のみが生き残る。	ルソン全土に残る残余兵、最後期の戦闘。歩兵第 39 連隊の残余兵が最大の抵抗。	抗日ゲリラ・フィリピン民間人、南部戦闘・マニラ市街戦期の虐殺の報復を、ルソンの残留日本兵に向ける。
8月24日		歩兵第 39 連隊の残留兵の多くが集合、帰還開始。	
8月31日	他の連隊の歩兵と共にバレテ東方のバラングアグに到着。		
9月6日	畑野稔本部附中隊、敗戦を初めて知る。		

9 月 7 日	岡本誠一中隊・小野一臣中隊、敗戦を初めて知る。		
9 月 8 日		第 8 師団・横山中将に敗戦伝わる。降伏文書に署名。	
9 月中旬	歩兵第 10 連隊、最終盤の抗日ゲリラとの戦闘で敗北、連隊全隊が壊滅へ。		
9 月 15 日～23 日	ほぼ全連隊に敗戦の報告と任務解除命令が伝わる。軍旗を焼く。	歩兵第 17 連隊の生存兵約 700 名、バナハオ山を下山。	
9 月 17 日	米軍により、ジョネスにて工兵第 10 連隊等と共に武装解除。生存兵、永久抗戦断念の意志を持つ。		
9 月 20 日～22 日	米軍により連隊解体。ロスバニョス捕虜収容所やバタンガス捕虜収容所に収容される。		
9 月末	永久抗戦を唱える歩兵が各中隊・小隊内でようやく孤立するようになる。	歩兵第 17 連隊・第 39 連隊・第 63 連隊の残留兵の多くが降伏。	日本軍第 8 師団の抗戦のおそれのなくなったルソン南部の広域を、抗日ゲリラ・米軍ゲリラが攻略。ルソン北上も継続。

9 月末～11 月	米軍・フィリピン人による「首狩り（首実検）」が実行される。歩兵第 10 連隊、抗日ゲリラ部隊との戦闘をほぼ免れ、首実検の犠牲者は他連隊より少ない。一方、爆死、自決、餓死、病死は他連隊より多い。	日本の生存兵、捕虜収容所に収容。連合軍・米軍・フィリピン軍・抗日ゲリラによる軍事法廷がひらかれ、フィリピン人遺族・民間人を呼び寄せ、虐殺実行兵を指名させてから処刑する「首狩り（首実検）」が実行される。歩兵第 17 連隊長：藤重大佐、フィリピン人虐殺の命令を認め、首狩りにより絞首刑。	
この時点の鉄 5448 の兵力	総員 150 名～272 名のいずれか、馬匹 0 「右の歩兵第 10 連隊は戦没者 2942 名、実に 92%の多きに達している」（歩兵第 10 連隊比島戦没者追悼之碑）		
9 月末～	順次、内地帰還開始。		
11 月	歩兵第 10 連隊の残留兵、北上してきた抗日ゲリラ・米軍ゲリラと戦闘。	歩兵第 17 連隊・第 39 連隊・第 63 連隊の残留兵、北上してきた抗日ゲリラ・米軍ゲリラと戦闘。	
12 月			
1946（昭和 21）年 1 月	連合軍・抗日ゲリラ・日本軍大本営からの終戦を知らせる報告・ビラに抵抗する歩兵がほぼいなくなる。	連合軍・抗日ゲリラ・日本軍大本営からの終戦を知らせる報告・ビラに抵抗する歩兵がほぼいなくなる。	公職追放。 マッカーサー元帥、極東国際軍事裁判所の設置を命令。
2 月		第 8 師団配属連隊・部隊、ほぼ解体・帰還完了。	
2 月 23 日		元第 14 方面軍司令官・山下奉文元陸軍大将の絞首刑執行。	

3 月	歩兵第 10 連隊の現地残留兵、ほぼ全員が降伏。	ルソン・サイパン・グアムの一部、ルバング島の小野田寛郎少尉らには、終戦報告と任務解除命令が届かず、以後それぞれ部隊単独で数十年に渡り戦闘継続。	チャーチル前英首相、「鉄のカーテン」演説。
-----	--------------------------	---	-----------------------

5. 歩兵第 10 連隊将校名簿

満州出発時以降の将校名簿を以下に示す。ただし、第 3 大隊はサイパン出発時以降の将校名簿を示す。「(氏名→)」は満州駐留時のものである。

日本全軍					帰還兵 311 万～353 万名 (戦死者 210 万～250 万名) (民間日本人を含む死者 310 万～340 万名)	2005年時点の帰還兵生存者	2015年時点の帰還兵生存者	
						51 万～55 万名	15～20 万名	
歩兵第 10 連隊幹部将校名簿								
大隊	中隊	序列	軍隊階級	氏名	終戦時の帰還兵	終戦時の部隊の状況 (数字は戦死兵の割合)	2005年時点	2015年時点
連隊総数					150名～272名のいずれか	壊滅 (1945 年) 92%	約 30 名	約 5 名
連 隊 本 部 (約 150 名)	通信中隊 速射砲中隊 連隊砲中隊 作業中隊	連隊長	大佐	田島正男→岡山誠夫 (1944 年 11 月、大佐)	帰還	母体帰還 (1945 年 10 月) 85%		
		副官	大尉	遠山実→畑野稔 (1944 年 12 月、中尉)	帰還 (畑野中尉のみ)			
		旗手	少尉	望月豊彦	戦死			

第 1 大隊		本部附	中尉	小野清志	帰還		死去 (1995 年)	
			中尉	畑野稔	帰還 (終戦時、本部附中隊長)			
			主計中尉	築沢克巳	戦死			
			主計少尉	荒井新	戦死			
			軍医少佐	阿部達	戦死			
			技術中尉	藤村貴好	戦死			
			獣医大尉	木村和弘	戦死			
	本部 (27 名)	大隊長	大尉→少佐	(時末少佐→) 立川潤吉	戦死	壊滅 (1945 年 3 月) 95%		
		副官	中尉	小野豊	戦死			
		主計	主計中尉	三浦忠	戦死			
		軍医	軍医中尉	松本恵	戦死			
			軍医中尉	沖義比古	戦死			
	第 1 中隊 (150 名)	中隊長	大尉	福元勝千夫→岡本誠一 (中尉)	帰還 (岡本中尉のみ)	母体帰還 (1945 年 10 月) 85%		
		小隊長	中尉	池田正之	戦死			
		小隊長	少尉	橋井峰太郎	戦死			
		小隊長	少尉	益田某	戦死			
	第 2 中隊 (150	中隊長	中尉	(西村中尉→) 三村唯三郎	戦死	壊滅 (1945 年 4 月 28		

	名)	小隊長	少尉	金尾毅	戦死	日～5月7日。約20名 が最後の玉砕。) 99%		
		小隊長	少尉	長谷川坦亨	戦死			
	第3中隊(150名)	中隊長	大尉	野崎勝	戦死	壊滅(1945年4月28日～5月7日。約30名が最後の玉砕。当初から野崎中隊長が連隊中で最も戦闘的な斬込隊を組織し、全隊玉砕。) 99%		
		小隊長	少尉	岡親弘	戦死			
		小隊長	少尉	藤井正	戦死			
		小隊長	少尉	小川久夫	戦死			
	第4中隊(150名)	満州出発直前に廃止し、他の中隊に編入(1944年8月)						
	第1機関銃中隊(136名)	中隊長	中尉	岩崎保行	帰還	壊滅(1945年4月29日～5月。9月時点で生存者10名。) 90%		
		小隊長	中尉	藤村森男	戦死			
		小隊長	少尉	福田勝明	戦死			
	第1大隊砲小隊(46名)	小隊長	少尉	岡本誠一	帰還(終戦時、中隊長・中尉)	壊滅(1945年4月20日。9月時点での生存者は岡本中隊長ほか数名。) 95%	死去(2002年10月29日)	
第2大	本部(27名)	大隊長	大尉→少佐	内藤正治←→小野一臣	帰還(小野	壊滅(1945年3月)		

隊				(1944 年 12 月、大隊長代理、中尉、のち大尉) → 武下圭助(1945 年 2 月 25 日、中尉)	大尉のみ)	98%		
		副官	中尉	吉川純市	帰還			
		主計	主計少尉	阿部嘉信	戦死			
		軍医	軍医中尉	梅村友之	自決			
			軍医少尉	栗田正長	戦死			
	第 5 中隊 (150 名) →集成第 8 中隊に再編 (1945 年 1 月。第 30 師団から岡山出身歩兵を編入)	中隊長	中尉	藤井憲→小野一臣 (1944 年 12 月、中尉、のち大尉)	帰還 (小野大尉のみ)	第 5 中隊壊滅 (1944 年 12 月) 集成第 8 中隊壊滅(1945 年 4 月。この時の生存者は約 20 名。9 月時点で 7 名。) 98%		
		小隊長	少尉	白神英一	戦死			
		小隊長	中尉	檜本朔	戦死			
		小隊長	見習士官	青江粲	戦死			
	第 6 中隊 (150 名)	中隊長	中尉	戸田秀夫	戦死	壊滅 (1945 年 4 月 29 日～5 月。9 月時点で生存者約 15 名。) 85%		
		小隊長	少尉	松本武	戦死 (小隊全滅)			
		小隊長	少尉	奥野計作	戦死			
		小隊長	准尉	木戸幸藏	戦死			
	第 7 中隊 (200	中隊長	中尉	佐野満寿二	帰還	壊滅 (1945 年 3 月。こ		死去

	名)					の時の生存者は佐野中隊長を含む4名のみ。)		(2007年)
		小隊長	中尉	中島高一	戦死	98%		
		小隊長	見習士官	雲溪某	戦死			
	第8中隊(150名)	満州出発直前に廃止し、他の中隊に編入(1944年8月)。第5中隊を集成第8中隊に再編						
	第2機関銃中隊(136名)	中隊長	中尉	武下圭助(1945年2月25日、大隊長に)	自決	壊滅(1945年3月)95%		
		小隊長	中尉	田中弘道	戦死			
		小隊長	中尉	真田茂	戦死			
	第2大隊砲小隊(46名)	小隊長	中尉	牛島輝次	戦死	壊滅(1945年3月)95%		
	第3大隊	本部(27名)	大隊長	大尉	(永島少佐→)森岡安太→田村英雄(1944年11月、少佐)	戦死	壊滅(1945年6月11日。9月時点で生存者数名。)90%	
			副官	中尉	笹野資郎	戦死		
			主計	中尉	池内多嘉男	戦死		
			軍医	中尉	金子某	戦死		
		第9中隊(150名)	中隊長	中尉	田辺宣夫	戦死	壊滅(1945年4月15日～5月。9月時点で生存者数名。)99%	
			小隊長	中尉	武村秀夫	戦死		

	第 10 中 隊 (150 名)	中隊長	中尉	平野実良	戦死	壊滅 (1945 年 4 月 15 日～5 月。9 月時点で生存者数名。) 99%		
		小隊長	中尉	佐藤和平	戦死			
		小隊長	少尉	年岡高夫	戦死			
	第 11 中 隊 (150 名)	中隊長	大尉	小谷笹市	戦死	壊滅 (1945 年 4 月 15 日～5 月。9 月時点で生存者数名。) 99%		
		小隊長	少尉	岩田周	戦死			
		小隊長	少尉	高橋剛一郎	戦死			
	第 12 中 隊 (150 名)	満州出発直前に廃止し、他の中隊に編入 (1944 年 8 月)						
	第 3 機関銃中 隊 (136 名)	中隊長	大尉	皆川喜一郎	戦死	壊滅 (1945 年 6 月 11 日。9 月時点で生存者約 20 名。) 85%		
		小隊長	少尉	高下勇	戦死			
		小隊長	准尉	赤木又一	戦死			
	第 3 大隊砲小 隊 (46 名)	小隊長	少尉	阿部定義	戦死	壊滅 (1945 年 6 月 11 日。9 月時点で生存者数名。) 95%		
連 隊 直 轄	通信中隊 (125 名)	中隊長	中尉	坂手可甫	戦死	母体帰還 (1945 年 10 月) 90%		
		小隊長	少尉	有元泰彦	戦死			
		小隊長	少尉	宮原秀臣	戦死			
	作業中隊 (100 名)	中隊長	中尉	山本清巳	戦死	母体帰還 (1945 年 10 月)		
		小隊長	少尉	荒木司郎	戦死			

		小隊長	少尉	田淵梅男	戦死	90%		
	速 射 砲 中 隊 (80 名)	中隊長	中尉	白神顯一	戦死	壊滅（1945 年 3 月） 98%		
		小隊長	少尉	太田新三郎	戦死			
		小隊長	少尉	多田邦雄	戦死			
		小隊長	准尉	前田武次郎	戦死			
		連 隊 砲 中 隊 (110 名)	中隊長	中尉	里見憲貞		戦死	壊滅（1945 年 3 月） 98%
	小隊長	少尉	小野鉄美	戦死				
	独 立 速 射 砲 (22 名)	中隊長	中尉	小林基樹	戦死	壊滅（1945 年 3 月） 90%		
		小隊長	中尉	小池弘志	戦死			
		小隊長	中尉	宮本宗夫	戦死			
		小隊長	少尉	吉田義一	戦死			
		新設・新属部隊						
	野 戦 補 充 隊	集成中隊を編 成（1945 年 3 月）	中隊長	中尉	吹野正美	戦死	壊滅（1945 年 6 月） 95%	
輜 重 兵 第 10 連 隊 第 2 大隊（自 動 車 編 成）	歩兵不足によ り、歩兵に改 編（1945 年 3 月 6 日） （100 名）	大隊長	大尉	米倉恵	戦死	壊滅（1945 年 4 月 19 日～25 日。この時の生 存者は 8 名。9 月時点 でも 8 名帰還。） 92%		

鉄 道 第 8 連 隊	歩兵不足により、歩兵に改編（1945 年 3 月 3 日に歩兵第 10 連隊配属、その後歩兵に改編） （100 名）	連隊長	中佐	柳明雄	戦死	壊滅（1945 年 3 月） 95%		
臨 時 第 5 野 戦 補 充 隊	歩兵不足により、航空の通信・情報部隊を歩兵に改編（ 600 名 ） （ 1945 年 3 月）	隊長	少佐	松尾岩雄	帰還	母体帰還（1945 年 10 月） 85%		

6. 歩兵第 10 連隊戦友会一覧

順に、戦友会名称、所在地、所属部隊名

★活動中、☆多くの会員（帰還兵）の逝去により活動停止・閉会

★岡山バレテ会、岡山県、歩兵第 10 連隊

☆14 年徴集同年兵会、岡山県、歩兵第 10 連隊

☆歩十ヤップ会、岡山県、歩兵第 10 連隊第 3 大隊（永島部隊）

☆央巧友の会、岡山県、歩兵第 10 連隊第 2 大隊

☆岡山ヤップ会（岡山三機会）、岡山県、歩兵第 10 連隊第 3 大隊機関銃中隊

☆歩十白山会、岡山県、歩兵第 10 連隊第 1 中隊（支那事変参加者・昭和 14 年 10 月内地帰還兵）

☆歩兵第 10 連隊第 7 中隊、岡山県、歩兵第 10 連隊第 7 中隊（昭和 14 年入隊兵）

☆小城子戦友会、岡山県、歩兵第 10 連隊第 10 中隊（昭和 8 年入隊兵）

☆赤柴毛利部隊会（赤毛会）、岡山県、歩兵第 10 連隊

☆歩兵第十聯隊会 ヤップ会、岡山県、独立歩兵第 329 大隊本部

☆北馬会、兵庫県、歩兵第 10 連隊本部

参考文献・動画・ウェブサイト

宇都宮直賢 『回想の山下裁判』 白金書房、1975 年

岡崎速、河本恒男 『赤柴毛利部隊写真集（岡山歩兵第十聯隊）』（改定版） 山陽時事新聞社、1974 年

桜田武、鹿内信隆 『いま明かす戦後秘史』（上下巻） サンケイ出版、1983 年

巢鴨法務委員会 『戦犯裁判の実相』 戦犯裁判の実相刊行会、1981 年

外山操 編 『陸海軍将官人事総覧 陸軍篇』 芙蓉書房出版、1981 年

外山操・森松俊夫 編著 『帝国陸軍編制総覧』 芙蓉書房出版、1987 年

西井弘之 『ルソン島・野戦病院全滅の記—鉄兵団・バレー峠・死の彷徨』 文芸社、2007 年

秦郁彦 編 『日本陸海軍総合事典』 第 2 版、東京大学出版会、2005 年

原剛 『明治期国土防衛史』 錦正社、2002 年

藤井弘道 『北部ルソン島鉄兵団岡山工兵第十連隊の記録—我が父は何処に眠る』 自費出版、国立国会図書館保存、2000 年

棟田博 『陸軍よもやま物語—用語で綴るイラスト・エッセイ』 光人社 NF 文庫、2011 年

ASEAN センター 編 『アジアに生きる大東亜戦争』 展転社、1988 年

『岡山県郷土部隊史』 岡山県郷土部隊史刊行会、1966 年

『「岡山郷土部隊」は何をしたか』 岡山・十五年戦争資料センター中国フォーラム編集委員会 編、岡山・十五年戦争資料センター、2001 年

『岡山県史』 岡山県史編纂委員会 編纂、岡山県、1983～1988 年

『岡山の記憶』 岡山・十五年戦争資料センター、創刊号・1999 年～

『日本陸軍連隊総覧 歩兵編（別冊歴史読本）』 新人物往来社、1990 年

『歩兵第十七聯隊比島戦史追録』 歩兵第十七聯隊比島会戦史追録編集委員会、1986 年

『官報』

『永遠の隣人--人民日報に見る日本人』 孫東民 主編、副主編 于青、段躍中 監訳、横堀幸絵・鄭萍・芦澤礼子・高橋庸子 翻訳、日本僑報

社、2002 年

A.フランク・リール 著、下島連 訳 『山下裁判』（上下巻） 日本教文社、1952 年

NHK 戦争証言アーカイブス <http://www.nhk.or.jp/shogenarchives/>

フィリピン最後の攻防 極限の持久戦 ～岡山県・歩兵第 10 連隊～

岡山・歩兵第 10 連隊 佐藤 春雄さん、市原 毅さん 「飢餓の果てに起きたこと」

岡山・歩兵第 10 連隊 平林 克巳さん 「兵站担当の師団参謀として」

岡山・歩兵第 10 連隊 佐野 満寿二さん 「戦後の人生はひっそりと」

岡山・歩兵第 10 連隊 小野 一臣さん 「戦友の最期を伝え続けて」

岡山・歩兵第 10 連隊 畑野 稔さん 「極限の末に見た“地獄”」

岡山・歩兵第 10 連隊 光延 一徳さん 「飢え死にか病死する兵士」

岡山・歩兵第 10 連隊 横山 泰和さん 「おどろきの米軍の機械力」

※ 以下、岡山歩兵第 10 連隊の駐留時およびルソン移動後の中国・満州戦線の動向が分かる動画タイトル

満州国軍 ～“五族協和”の旗の下に～

中国華北 占領地の治安戦 ～独立混成第 4 旅団～

華北・ゲリラ掃討戦 敵は民の中にありて見えず ～島根県・歩兵第 163 連隊～

中国戦線 大陸縦断 悲劇の反転作戦 ～福島県・若松歩兵第 65 連隊～

満蒙国境 知らされなかった終戦 ～青森県・陸軍第 107 師団～

※ 以下、岡山歩兵第 10 連隊による最終戦闘以前のフィリピン戦線の動向が分かる動画タイトル

フィリピン・シブヤン海 “戦艦武蔵の最期”（再公開版）
フィリピン・ルソン島 補給なき永久抗戦 ～陸軍第23師団～
ルソン島 悲劇のゲリラ討伐作戦 ～秋田県・歩兵第17連隊～
フィリピン・エンガノ岬沖 ～囀（おとり）とされた空母 瑞鶴～
フィリピン・レイテ島 誤報が生んだ決戦 ～陸軍第1師団～
フィリピン 絶望の市街戦 ～マニラ海軍防衛隊～

戦場体験放映保存の会 <http://www.notnet.jp/yoronsenjoyohozonFrameset-01.htm>

戦場体験史料館（戦場体験放映保存の会が運営） <http://www.jvvap.jp/>

（戦場体験放映保存の会と戦場体験史料館の事務局の所在地：東京都北区滝野川 6-82-2、公益社団法人マスコミ世論研究所内。その他情報はサイトへ。）

戦友会研究会 <http://www.senyuken.jp/static/>

一般財団法人 岡山県遺族連盟 <http://izoku-okayama.jp/>

岡山・十五年戦争資料センター <http://ojsc.sakura.ne.jp/>

ふみさんがはなすもびらのはなし（茂平の話） <http://kasaoka.yu-yake.com/f/>

YASUYOSHI AOKI'S HOME PAGE はい 青木です！ <http://ww32.tiki.ne.jp/~yamikato1952/>

『北部ルソン島鉄兵団岡山工兵第十連隊の記録』 <http://web.thn.jp/sisetu-bunkokan/hoka70.html>